

『平家物語』との縁

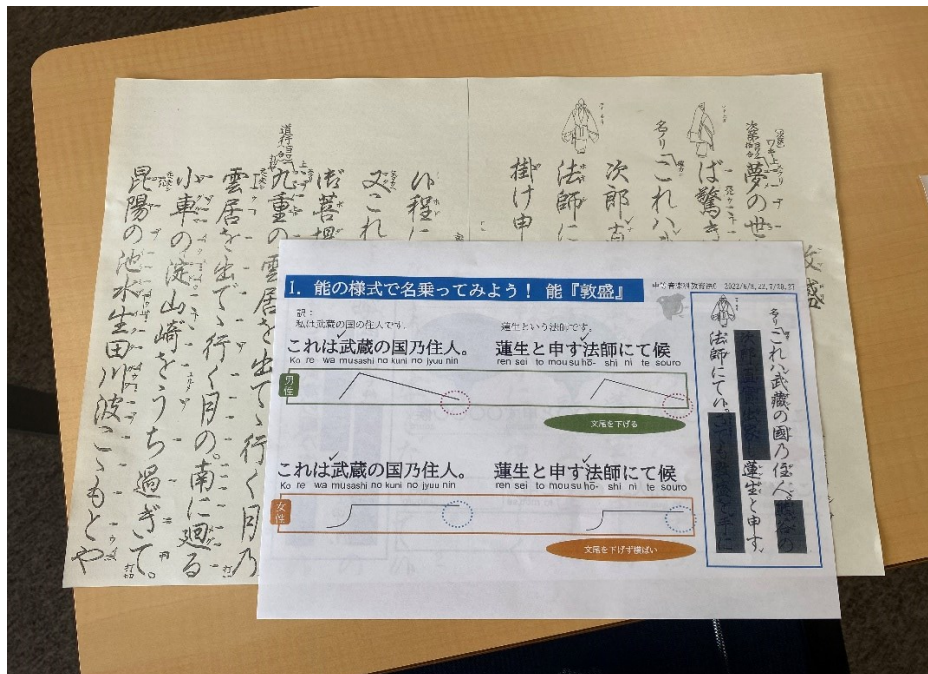
キン アンキ
教育学部 交換留学生 中国

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり、娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顕す。」私はこの一句を朗読するたびに世の変転の衰れを感じる。この言葉の魅力は、古今に亘って語り継がれている。私もこの言葉に惹かれ、『平家物語』と縁を結んだ。

初めて『平家物語』に触れたのは自分の国で同名のアニメを見た時だった。『平家物語』アニメは、アニメに特有な誇張された画面表現を使っているが、古典文学の耽美と伝統的な感覚は保たれている。このアニメのおかげで、私は『平家物語』と言う古典文学作品に出会った。

和歌山大学に来てから、授業で何度も『平家物語』に触れた。例えば、松下先生の「日本文化入門」の授業で原作の一部を朗読し、さらに長友先生の「日本語中級C」の授業で『敦盛』という「能の謡」を体験した。すごく幸運だと思う。これらの体験を通し、私は『平家物語』への認識を深めた。私はこの作品に、より興味を持つようになった。

原作を朗読した時、私はビデオの手本を模倣し、深い調子で朗読するように努力した。やはり口で言う朗読は見るだけの黙読とは違う。「諸行無常」の意味がより深く感じられる。また、私は人物の会話の読み方を工夫したが、アナウンサーのように人物の台詞を完璧に再現するのはうまくいかなかった。それでもいい勉強になった。



もう一つのイベントは『敦盛』という「能の謡」を体験したことだが、専門的な歌い方のため、より難しいと思った。「能」は日本の伝統的な芸術の一種である。私は初めて「能の謡」を聞いた。驚いたことに、先生はマイクなどの設備を使わず、地声のまま大きな声で歌った。お腹の力を使い、色々なテクニックを使っていたようだ。先生は、『敦盛』を演

じた時、リズム感が強かった。まるでその光景が目の前に現れたような気がした。私たちは能の様式で自分の名前を名乗ってみた。すごく面白く、みんなで楽しんだ。

『平家物語』は、最初、琵琶法師たちが世間に歌って語ったそう。琵琶法師たちは最初の一句によって、冒頭からこの物語の悲劇性を伝えていた。「祇園精舎」以下の部分で平清盛が紹介されるが、彼は王朝に逆らった反逆者のように位置付けられている。そして、この部分は平清盛をはじめとする平家一門の穏やかではない生涯を暗示している。

これに対応し、『平家物語』はより少ない紙幅で平家の栄えを表現している。その一方で、ほとんどの紙幅では平家の衰えの流れを描写している。あれほど強大だった家門が、わずかな間に消えてしまったとは、嘆かざるを得ない。確かに平家は勢力が強く、勝手気ままに一般人を圧迫していたが、一族には有能で善良な人もいた。そして、私は自分の感情をこの作品に持ち込んだ時、家族が衰えるばかりで、一族の人が消えていくのを見ると、悲しくて仕方がなかった。例えば、原作の「敦盛」の人物会話を朗読した時、私は敦盛の死を悲嘆しつつも敦盛の自分の信念への執着に感服した。熊谷直実は武家に生まれたから、自分の手で自分の息子と同じぐらいの歳の少年を殺さなければならなかった。これはなんと悲しいことだろう。

しかし、私はまた『平家物語』アニメのオープニングの歌詞を思い出した。「何回だって言うよ、世界は美しいよ、君がそれを諦めないからだよ。」たとえ運命は最初から決められているとしても、今私たちはこの世界に生きている。たとえ諸行無常であっても、一つの生命がこの世界に存在した時、その美しさはすでにそこに咲いたといえる。その美しさはこの世界に残っている。これがこの作品の一つの意味なのかもしれない。

時間は一代また一代と移ってゆく。英雄か凡人かに関わらず、過去の人、誰もが自分の印を残した。その印は現代に到達し、未来に通じる。私達が残した印も必ず未来に通じると思う。



参考文献：

呉起燾 『『平家物語』の研究』. Diss. 東北大学, 2001.

The thread that connects me to *Heike Monogatari*

JIN ANQI

Faculty of Education, Exchange Student / China

I first got to know *Heike Monogatari* because of its namesake anime. At that time, I only knew that *Heike Monogatari* is a Japanese classical literature. After I learned about it, I realized that it was the peak work of the monogatari. When I came to Wakayama University in Japan, I had the honor to come into contact with *Heike Monogatari* for many times in class, and experienced the reading of part of the original work and the performance of "nou" which named *Atsumori*.

"The sound of bells echoes through the monastery at Gion Shoja, telling all who hear it that nothing is permanent." The first sentence of master biwa's verse has hinted at the tragedy of the story. It is sad that the family, once so strong, has died out so quickly in such a short time. and when I get into the emotions of these characters, watching families go from good to bad, and people in the family disappear without being able to do anything about it, I can't help but feel sad. But then I thought of a line in the opening song of the anime, "No matter how many times I say, the world is actually beautiful, because you never give up." Even if the world is changeable, when a life exists in this world, it has blossomed its beauty to the world, and its beauty has been retained in the world. Maybe this is also the connotation of this work.

与《平家物语》之缘

金 安琪

教育学部 交换留学生/中国

我与《平家物语》的缘分结于其同名的动漫，那时我只知道《平家物语》是一部日本的古典文学，了解后才得知它是与《源氏物语》地位不相上下的物语的最高峰作品。当我来到日本和歌山大学后，我又有幸多次在课堂上接触到《平家物语》，体验了一部分原著的朗读和名为《敦盛》的“能之乐”的表演。

“祇园精舍钟声响，诉说世事本无常。沙罗双树花失色，盛者必衰如沧桑”，琵琶法师唱段的第一句便已经暗示故事的悲剧性，每每咏出这一句总会油然而产生无尽的沧桑悲凉之感。曾经那么强势壮大的家族，却在短短时间内迅速消亡，令人不禁唏嘘。纵使平家仗势欺人，但家族中也不乏很多正直善良有才之人，而当我带入这些人物的情感，目睹家族由盛转衰，家族中的人一个个消逝却无能为力，便不由得产生悲伤心痛之感。

可我转念又想到了同名动画的片头曲中的一句词，“无论多少次我都会说，这个世界其实很美丽，因为你从不言弃”，纵然世事无常，但当一个生命存在于这个世界时，它已向世间绽放了它的美丽，它的美丽曾留存于世间，也许这也是这部作品的一层内涵吧。时间走过一代又一代，无论是英雄还是凡人，他们都曾留下自己短暂的印记，到达现在，又通向未来。